

ASIA Indicators

定例経済指標レポート

豪準備銀、さらなる利下げに含み (Asia Weekly (7/4 ~7/8))

～今後の行方は物価及び不動産市況の動向が鍵を握る～

発表日: 2016年7月8日(金)

第一生命経済研究所 経済調査部

主席エコノミスト 西濱 徹 (03-5221-4522)

○経済指標の振り返り

発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
7/5(火)	(台湾)6月消費者物価(前年比)	+0.90%	+1.10%	+1.23%
	(フィリピン)6月消費者物価(前年比)	+1.9%	+1.9%	+1.6%
	(豪州)5月小売売上高(前月比/季調済)	+0.2%	+0.3%	+0.1%
	金融政策委員会(政策金利)	1.75%	1.75%	1.75%
7/8(金)	(台湾)6月輸出(前年比)	▲2.1%	▲3.1%	▲9.6%
	6月輸入(前年比)	▲10.0%	▲3.5%	▲3.4%

(注) コンセンサスは Bloomberg 及び THOMSON REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。

[豪州] ～個人消費は力強さを欠くなか、中銀は追加利下げの可能性に含みを持たせつつ金利を据え置く～

5日に発表された5月の小売売上高(季調済)は前月比+0.2%と5ヶ月連続で拡大基調が続いており、前月(同+0.1%)から拡大ペースは加速したものの、力強さに欠ける動きとなっている。財別では、食料品など生活必需品に対する需要は底堅い一方、生活雑貨や宝飾品のほか、高額消費など不要不急の財に対する需要は弱含んでおり、生活防衛色が強まる動きもみられる。地域別では、最大都市シドニーを擁するニュー・サウス・ウェールズ州で堅調な動きが続く一方、鉱物資源関連が産業の中心である西オーストラリア州やクイーンズランド州では弱含んでおり、足下において国際商品市況の上値の重さが足かせになっていると言えよう。

また、同日に豪州準備銀行は定例の金融政策委員会を開催し、政策金利であるオフィシャル・キャッシュ・レート(OCR)を2会合連続で過去最低水準である1.75%に据え置く決定を行った。会合後に発表された声明文では、海外経済及び国際商品市況に対する見方は前回会合からほぼ変わっていない一方、英国のEUからの離脱を受けて国際金融市場は「ボラタイルな動きをみせており、現時点でその影響を判断することは難しい」とした。その一方、同国経済については「全体的に成長が続いている」との見方を変えていない一方、労働市場の弱さと海外での物価下押し圧力を受けて足下のインフレ率は「極めて低い」としており、先行きも「しばらく低水準で推移する」との見方を据え置いた。また、低金利状態の長期化と豪ドル安について「経済構造のリバランスを推し進める」との見方を示す一方、このところの豪ドル高基調が「問題を複雑化する」としてけん制する姿勢もみせている。その上で、一部に過熱感が出ていた不動産市況については「規制の影響で貸出基準が強化された兆候があり、一部では貸出への慎重姿勢もうかがえる」と効果を評価する一方、先行きについては「東部を中心にアパート供給の拡大が見込まれる」とした。現時点では金利据え置きが妥当との考えに至ったとみられるが、金融市場や物価動向などによっては追加利下げの可能性に含みを持たせている。さらに、不動産市況が沈静化していることが一段と確認されれば、そのハードルは低下していくものと予想される。

図1 AU 小売売上高の推移

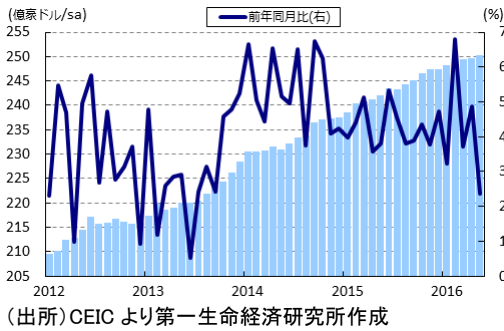
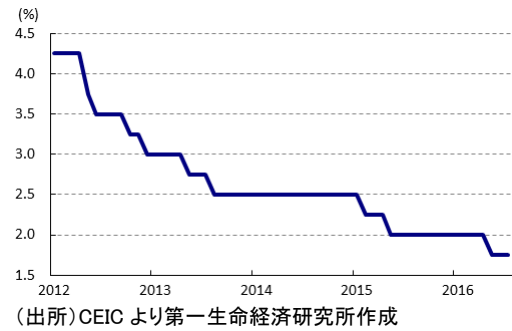


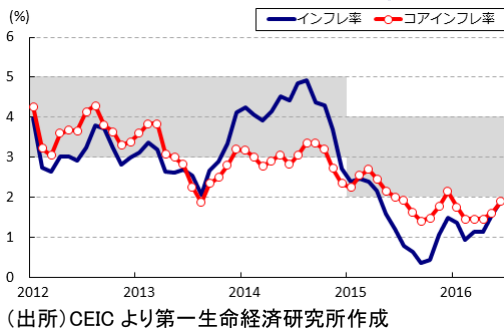
図2 AU 政策金利の推移



[フィリピン] ～生活必需品を中心にインフレ圧力が高まるなか、堅調な景気を反映したインフレ圧力も～

5日に発表された6月の消費者物価は前年同月比+1.9%となり、前月（同+1.6%）から加速した。前月比も+0.42%と前月（同+0.35%）から上昇ペースが加速しており、穀物や生鮮品を中心に食料品価格が上昇基調を強めていることに加え、年明け以降の原油相場の上昇を反映する形で一部のエネルギー価格が上昇に転じるなど、生活必需品を中心に物価上昇圧力が高まっている。他方、食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率も前年同月比+1.9%と前月（同+1.6%）から加速しており、前月比も+0.36%と前月（同+0.14%）から上昇ペースが加速している。例年6月は学校の新年度開始月に当たるために教育費が上昇する傾向があるものの、今年は例年に比べて上昇ペースが抑えられている一方、足下の景気の堅調さを反映してサービス物価に上昇圧力がくすぶっているほか、幅広く消費財物価も上昇基調を強めている。

図3 PH インフレ率の推移



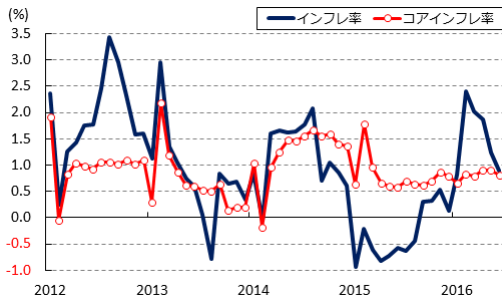
[台湾] ～景気の先行き不透明感を反映してサービス物価や幅広く消費財物価も上昇しにくい展開が続く～

5日に発表された6月の消費者物価は前年同月比+0.90%となり、前月（同+1.23%）から減速した。ただし、前月比は+0.34%と前月（同▲0.38%）から2ヶ月ぶりに上昇に転じており、依然として穀物や生鮮品を中心に食料品価格は下落基調が続いている一方、年明け以降の原油相場の上昇を反映する形でエネルギー価格が大幅に上昇しており、これが全体的な物価上昇に繋がった。なお、生鮮食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率は前年同月比+0.72%と前月（同+0.84%）から減速しており、前月比も+0.00%と前月（同▲0.06%）から下落基調は止まっているものの、落ち着いた推移が続いている。景気の先行き不透明感を反映する形でサービス物価は落ち着いていることに加え、消費財価格についても全般的に上昇しにくい展開が続いている。

8日に発表された6月の輸出額は前年同月比▲2.1%と17ヶ月連続で前年を下回る伸びとなったものの、前月（同▲9.6%）からマイナス幅は縮小している。前月比も+4.3%と前月（同▲2.6%）から2ヶ月ぶりに拡大に転じており、最大の輸出先である中国本土向けに底入れの動きが出ていることに加え、米国や日本、EUなどの先進国向けを中心に底打ち感が出ていることが影響している。財別では、主力の電気機器や電子部品関連を中心に底打ちしたことで輸出全体の押し上げに繋がっている。一方の輸入額は前年同月比▲10.0%と19ヶ月連続で前年を下回る伸びとなり、前月（同▲3.4%）からマイナス幅も拡大している、前月比は▲0.3%と前月（同+7.6%）まで3ヶ月連続で大幅な拡大が続いてきた状況から4ヶ月ぶりに減少に転じているが、減

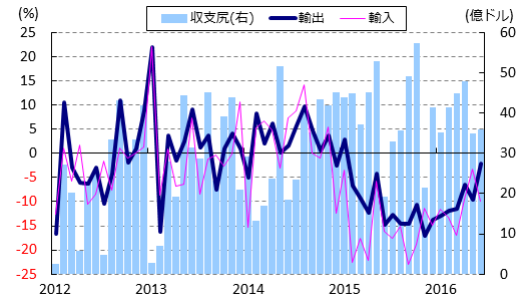
少幅はわずかに留まる。年明け以降における原油をはじめとする国際商品市況の上昇が輸入額の押し上げに繋がっている。結果、貿易収支は+35.80億ドルと前月（+35.00億ドル）から黒字幅がわずかに拡大している。

図4 TW インフレ率の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

図5 TW 貿易動向の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

以上